

『水俣市所蔵・淇水文庫徳富蘇峰寄贈図書目録』の

作成経緯とその意義

——「水俣町の精神的方面の燈台」復元を期して

田 中 智 子

二〇一七年十一月、同志社大学人文科学研究所（以下「人文研」）は、『水俣市所蔵・淇水文庫徳富蘇峰寄贈図書目録』を刊行した。小文は、その経緯と目録の内容を紹介し、本事業の意義を考え、今後の徳富蘇峰研究の一助とすることを期するものである。

I 目録作成の経緯

同志社大学が新島八重ブームに沸いた二〇一三年は、徳富蘇峰生誕から百五十年目にあたる年であった。

この年三月五日から六日にかけて、同志社社史資料センター第二研究「同志社社史研究」は、蘇峰生育の地、熊本県熊本市および水俣市における関連史料・史跡の調査を行った。参加者は、研究代表者を務める森靖夫同志社大学法学部助教（当時）、研究会員の伊藤彌彦名誉教授（元センター長）、および人文研専任研究員の田中智子助教（当時）の三名であった（以下、関係者については敬称略）。突然の訪問ながら、水俣市教育委員会により

関連施設や市内各所の懇切極まりないご案内をいただいたが、一番の収穫は、水俣市立図書館書庫内に、蘇峰やその遺族による大量の寄贈図書（以下「蘇峰寄贈図書」）が未整理のまま保管されていることを認識できた点であった。

同年三月末日をもって、「同志社社史研究」は研究期間の終了を迎えた。年度が替わり二〇一三年四月からは、人文研第一八期第一研究「近代日本とキリスト教」（代表・神学部原誠教授、研究期間…二〇一六年三月まで）がこの案件を引き継ぐこととした。市立図書館書庫内の「蘇峰寄贈図書」の目録化の必要性は共通の理解となったが、研究会が現地での作業を長期間継続的に進めることは、物理的に不可能であった。そこで、まずは図書館が作成した寄贈書簿（図書原簿）を借り出し、同志社大学において入力作業を進めるという方法によって、目録化にとりかかることとした。本作業は、主に社会学研究科大学院生の林潔が行った。林は二〇一五年度より人文研「キリスト教社会問題研究」（略称「CS」）系研究会の研究補助者となり、目録刊行に至るまでの諸作業に一貫して従事することとなった。

二〇一四年度より、上記入力作業の結果を図書館所蔵の原本と照合し、所在を確かめる作業に着手することとした。長期にわたる現地での作業の必要が見込まれたため、人文研（同志社大学）からの委託事業として、水俣市教育委員会側でアルバイト要員を雇用、業務遂行していただく方法をとった。この作業は、次年度まで継続して行われた。

同作業が完了し、研究会期の終了を控えた二〇一六年一月五日から六月にかけて、田中は先述の伊藤、林、また林と同じくCS系研究会研究補助者の大学院生遠藤浩（神学研究科）の三名と市立図書館を再訪して現状を再調査し、以後の方策について市教育委員会ともあらためて相談した。

その上で、目録化に向けての最終作業を進め、二〇一六年度以降は、第一九期第一研究「キリスト教と日米地域社会の形成」（代表・神学部原誠教授。二〇一六年十月より代表・社会学部吉田亮教授）の下に位置づけ、このたび『水俣市所蔵・淇水文庫徳富蘇峰寄贈図書目録』の完成をみるに至った。

目録の「公刊」に際しては、同志社ゆかりの蘇峰研究に対する多大な貢献が想定されること、そして何よりも蘇峰自身の寄贈書のデータ化であるという事業の性質に鑑み、是非とも徳富基金（事務局・同志社社史資料センター）の助成を仰ぎたいと考え、人文研より申請を行ったところ、二〇一七年七月三十一日に承認を得ることができた。

II 目録の特徴

水俣市は、市立図書館のほかに、蘇峰・蘆花生家（市文化財）や市立蘇峰記念館といった施設を運営し、蘇峰研究のための資料所蔵機関としては、図書館よりもむしろ蘇峰記念館の方が有名であり、活用もされてきた。一方、蘇峰や遺族が寄贈した大量の図書が市立図書館に所蔵されることは、研究者の間でもほとんど認識されていなかった。

現在の市立図書館は一九八二年に設置されたものであり、それまで水俣の公立図書館として利用されてきた施設が、現在の市立蘇峰記念館である。後述のように、一九二九年に開館して以来、水俣の公立図書館としての役割を果たしてきた「淇水文庫」が、あたらしい市立図書館の建設に伴い、「蘇峰記念館」と称する資料館的組織へと模様替えされたもので、今日に至るまで、蘇峰・蘆花関連資料の所蔵・展示・公開機関として機能してきた。

今回作成したのは、市立図書館が所蔵する「蘇峰寄贈図書」を中心とする目録であるが、この図書群を総合的に把握すべく、蘇峰記念館に所蔵される（すなわち元淇水文庫に所蔵されたままの）寄贈図書も含めた。また、現在行方が知れない、あるいはすでに廃棄された「蘇峰寄贈図書」も目録化した。現実の所在の有無にかかわらず、蘇峰がどのような図書を所蔵し寄贈したのかを把握することを重視したからにはかならない。この点は、本目録の特徴とするところである。

「蘇峰寄贈図書」として把握できたのは、約八三〇〇件である（シリーズ複数冊をまとめて換算した場合もあるので、「件数」で示した）。図書館がOPACに蔵書登録しているのが約一八〇〇件、OPACには非登録ながら図書館書庫内に保管されるのが約三四七〇件、蘇峰記念館が所蔵するのが約三九〇件、現存不明（一部は「廃棄図書簿」によって廃棄を確認）が二六六〇件、といった内訳である。

かつて大規模な廃棄が行われた理由は不明であるが、例えば新図書館の設置に伴う蔵書移動の際に、何らかの基準によって選別・廃棄が行われたのではないかと推察される。後述する淇水文庫の理念に照らせば残念なことであるが、図書館には図書館なりの事情や理由があったのだろう。今後、「蘇峰寄贈図書」の散逸を防ぐとともに、何らかの選別が必要となった際の判断材料とするためにも、今回の目録作成は意味のある事業と考える。

寄贈図書は和書が基本であり、ジャンルは辞典・政治・宗教・歴史・文学・評伝・児童書など、多種多様である。これらを分析すれば、蘇峰の目指した郷里水俣のための一般図書館像が見えてくることだろう。また、省庁のパンフレットなど、かならずしも図書とはいえないものも含まれる。中には、今日手に入りにくい貴重な文献もあると容易に想像されるが、その見極めは筆者の能力を超えるところであり、目録利用者の眼力に委ねたい。蘇峰研究という視点を超え、利用価値の高い図書が種々含まれるものと思われる。

なお水俣市は二〇〇五年、市立蘇峰記念館所蔵資料全体を対象に、「水俣市立蘇峰記念館資料目録」と題するファイルを作成している。この目録は、蘇峰の寄贈図書以外の図書や、書簡・書類、新聞、写真、書画、扁額など、多様な史料を混載した形で作成され、蘇峰記念館に備え付けられている。対するに今回の目録は、一九二九年以来一九七〇年に至るまで、蘇峰とその遺族が、淇水文庫の充実を期して寄贈した書籍を対象とするものである。すなわち蘇峰記念館に別途寄贈された、蘇峰・蘆花自身が作成したり使用したりした史料（例えば有名な大江義塾関係史料など）は範疇外にあり、それらについては、前掲「水俣市立蘇峰記念館資料目録」に譲るところとなる。

Ⅲ 「淇水文庫」をめぐる

1. 沿革

時間軸としては順序が逆となったが、続いて、一九二九年に発足した「淇水文庫」そのものの設立経緯を紹介しておく。

二〇一六年一月に実施した第二回現地調査の折、市立図書館書庫に排架される一〇冊ほどの『図書館日誌』の横に、『重1』『重2』『重3』とのみ背表紙に記された製本書類三冊を発見した（「重」は「重要」の意味か）。このうち『重2』には、「昭和五年三月―昭和二十八年」との付記があり、水俣町立淇水文庫が発行する「水俣町立淇水文庫経営の実際」と名付けられた小冊子数年分が綴じ込まれ、淇水文庫の成立過程や運用実態、特質について、有用な情報を提供してくれる。そのうち、一九三四年十月三十日発行の冊子に記載されているのが、淇

水文庫開館式における徳富蘇峰の挨拶文である。貴重な記録であるため、本稿末尾に全文を収録した。

この演説記録にもあるように、水俣における図書館創設計画の発端は、一九二二年五月にまでさかのぼる^①。蘇峰は水俣に住む従弟の徳永正に、父の号・淇水を冠した図書館を建設し、後進子弟に就学の途を開きたいとの希望を告げた。さらに一九二八年一月、水俣町が昭和天皇御大典記念としてこの図書館を建設し、町として経営するならば、一万円を寄附する意思があることを伝えた。徳永はこれを水俣町に諮るとともに、水俣小学校に町内有志を集めて意見を聴取した。多数参集した有志はこの計画に賛同し、名称を「淇水文庫」とすること、建設会を組織すること、広く寄附を募ることの三点を決議し、建設委員二十五名を選出した。一方水俣町も、淇水文庫を町営とすることに決し、敷地代二千元を計上した。

一九二九年一月に起工し、蘇峰を招いての開館式を経て、十月に竣工をみた建物は、現在も蘇峰記念館として使われている。同年十二月からの準備期間を経て、翌年三月二十一日、一般の閲覧が開始された。図書の携出が可能となったのは一九三一年四月一日からで、同二十八日より熊本県立図書館巡回書庫の回付も受けるようになった。一九三四年二月二十一日には、文部省から奨励金百円を得た。

2. 理念と実際

淇水文庫の使命は、以下のようにうたわれた^②。

- 一、普通文庫としては、児童男女青年其の他一般人の公益を謀る。
- 二、特殊文庫としては、肥後に関する凡有る文献を蒐集供給すると共に、徳富家の諸記録、之に関するもの、蘇峰蘆花先生の著書等を、特殊研究者・調査者に資料として供給する。

続いて文庫の経営方針としては、次の五点が掲げられている。

- 一、創立者の志旨を遵守し、其の徹底を努む。
- 二、所在地有志者と協戮し、恒に其の同情と賛翼とを文庫経営の上に鍾むることを先務とする。
- 三、普通文庫・特殊文庫、両様の目的に副ふべく、一般観覧者・特殊観覧者を吸引することを須臾し忘却せず、そのために全身全力をつくす。
- 四、書籍を愛護し特に別格取扱の文書、書籍、什物は之を宝重し、決して粗略放漫にせず。
- 五、一切の事務誠意と新設とを以つて経緯とし地方文化教化の中心たらしむるを以つて其の本旨とし之が為めには凡有る犠牲を払ふも辞せず。

淇水文庫の蔵書は、新刊図書と寄贈図書から構成された。前者については選択に深甚の注意を払うことが必要とされ、「選択者の心得」として、「自我的であつたり、環境に捉はれたり、時代思潮に影響されたりすることのないやう、中正公平の態度を持する」ことが示されている。また後者については、蘇峰が一九三二年までに約三八〇冊の寄附をしたことが記されているが、ほかに満鉄などからも多くの寄附があり、新聞雑誌の寄贈も記録されている。すなわち淇水文庫とは、蘇峰だけではなく、広範囲からの寄贈図書によつて成り立つ図書館であった。寄贈図書については、「丁寧に取り扱ふ。よく活用をはかり寄贈者の好意を永く伝へるやう努力する」と記されるところにも、寄贈を受ける際、「図書の選択は文庫におく」とされた。

一九三五年の国勢調査によれば、水俣町の世帯数は五三三九、人口は二七六九三人（男性一三七四九人、女性一三九四四人）である。⁽³⁾一九三二年の四月から翌年二月までのデータによると、淇水文庫の総利用者数（「庫外日借覧人員」）は、計二九五五八名である（うち男性が二四三〇五名）。水俣市の総人口をしのぐ延人数の利用

があったということになるが、同時に、水俣の図書館文化とは圧倒的に男性のものとして始まったという事実も浮かび上がる。

ちなみに、一九三四年に刊行された先述の小冊子に収載された、町内における新聞雑誌購読状況の調査によると、新聞は三〇二五名の購読者数があり（うち『大阪毎日新聞』が最多で二五四名）、世帯数比で約五六%の購読率となる。

3. 蘇峰にとっての書籍——「天下の公宝、すべからく愛護せよ」

蘇峰は洪水文庫開設の一九二九年、道楽というほどの道楽はないとしながらも、相手が要らず独り自ら楽しむものとして、散歩とともに「読書」が自分の道楽であると明かした。^①

そして彼は、「これ迄書籍を他に寄贈し、若くは書肆と交換したことはあつたが、〔筆者注：東京に移住した〕明治二十年以来未だ蔵書を売払つたる記憶がない」としながらも、本というものについて、「書籍は兎角遠心力が勝つてゐる。何かの機会さへあれば飛出し、飛去る傾きがある。されば「子孫永保」とか、「これを販売するのは不孝である」とか、種々訓辞めきたる印を捺して置くのは、書籍本来の性質に反対するものだ」と、独自の書籍観を披露した。^②

蘇峰は、これとは思つた書籍には「天下之公寶須愛護」（天下の公宝、すべからく愛護せよ）との印を押し出したという。「何人にせよ、この書籍を所持する者は、寧ろ預り主と心得、それを大切に取扱ふといふことだ。詰り予の見解が間違つてゐなければ、書籍は一人一個の所有で無く、天下の公寶で、これを愛する者の手から手へ渡すべきが当然である」というのが、蘇峰の考え方であつた。ここには、書物を公共財と捉える見方があらわれて

おり、蘇峰が多数の書籍を淇水文庫に寄附したのも、このような考え方に基づく行為であったといえる。⁽⁶⁾

むすびにかえて

ジャーナリスト・思想家・文筆家・歴史家・評論家・経営者等々、多彩な肩書きを有する蘇峰であるが、淇水文庫創設事業が語るののは、彼の社会事業家としての横顔である。

蘇峰に即してみた場合の「社会事業家」は、「啓蒙家」との重なりを有する概念であり、いわば「啓蒙家の戦間的形態」であろう。郷里水俣での図書館建設構想は、明治啓蒙家であった蘇峰が、大正期に及んで着想するに至った社会事業であった。書物を愛してやまない蘇峰が、一般の人々にとつての読書や書籍の意義をどのように捉えていたか、彼の郷土観・水俣観がそこにとどのようにからむのか、今後の追究に俟つところは大きい。このコレクション中に「天下之公寶須愛護」の押印がある書籍がどのくらい含まれているかを調査してみることができらるだろう。また、郷土研究者・徳富家研究者を利用者として想定した特殊文庫が設置された点は、そもそもこの図書館が、郷土資料館的な機能も合わせもって発足したことを示し、図書館史の方面においても、興味深い事例である。

最後に、本目録は、「蘇峰寄贈図書」の存在に気づいた最初の水俣訪問から四年半をかけて完成をみた。その間、水俣に所蔵される図書の目録を京都において作成する、という地理的な困難を乗り越えるべく、特に二つのあたらしい試みをなした。まずは、現物からではなく、図書原簿を利用して基礎リストを作成する方法を採った。これにより京都での作業が可能となり、かつ、現在所在が確認できない寄贈図書のリストを作成することができた。

次に、同志社側のファンドを用い、水俣市に現地での人材確保と業務遂行を委託するという協同作業形態を考案した。水俣市側の理解を得て、これらの工夫が着想に終わらず、現実に行い得たことは幸いであった。

水俣市との関係、あるいは同志社内の各組織間においても、セクシヨナリズムに悩まされることなく、円滑にかつ気持ちよく本事業を進めることができた。業務委託方式は、史料をめぐる今後の諸事業に応用できるのではないか。

目録は、同志社大学の人文研や社史資料センター、図書館に備え付けたほか、全国の諸大学に配布した。筆者の関心は「社会事業家・蘇峰」に集中したが、本目録が蘇峰研究全般に、さらには日本近代史方面のさまざまな研究に役立つことを願っている。

〈史料〉

「淇水文庫開会式に於ける蘇峰先生挨拶 昭和四年五月二十六日」

本日は私の父淇水の十七回忌でありまして、大正三年のこの忌日に亡くなったのであります。ここに父の名を冠する文庫の開館式に参列することは、最も感慨深き所であります。これは偏に皆様方の御力によるわけで、有難い次第で御座います。本日は各地からまで御光臨下さいまして、地下の私の父も感激に堪えない事であらうと思ひます。丁度私が大正十一年の五月、其の時の町長深水頼資及び従弟の徳永正に図書館建設の話をして金を少し残して置いた。其後御当地の事情もありました所、昨年御大典を考へ、私も年を取りましたので父の志が空しくなりませぬかと考へて、この書籍館の建設の運びに至ったのであります。幸、御当地皆様方の御同情と公共心厚くあられる為に本日の喜びを見る事となりましたと云ふのは、私にとりましても本望であります。

なぜに書籍館の必要があるかと云へば、学校は決まつた学課を教へ、書籍館は学校以外の学校と云ふことが出来る。水俣が古来如何なる土地であつたかは、私より今更に喋々と申すまでもなく、肥薩の国境の一漁村に過ぎなかつたのでありますが、日本の血脈の動く大動脈の一つであります。一千数百年前より、国史の上の流れれてゐて、昨日今日出来た土地でない。少くも千数百年の歴史を持つてゐるのであります。この水俣が色々の変化があつて、維新以降は大いに発展してきたのであります。今日は煙突が林立してゐる状態でありまして、昨日牧の内より見ました水俣は、大阪附近の様な状態であります。私共の子供の時には、煙突と云へば塩濱の塩竈の煙突のみで、かくの如き変化進展するとは到底夢想だもしなかつた所であります。今日水俣町に書籍館の必要を感じるのは、水俣町は既に物質的に長足の進歩をなした。しかし単に物質的の進歩では真実の進歩とは云へない。精神的智識的に調節しなければなりません。英国のマンチエスターは、規模の大小こそあれ水俣町の様な工業都市であるが、ライランド婦人と云つて金持の後家さんがゐて、英国第一のスペンサー伯の書籍と世界のあらゆる貴書とを買受け、これを市に寄附した事がある。市民がこれによつて受くる利益は、蓋し大なるものであります。水俣町は物質的にマンチエスターには及ばないが、淇水文庫はマンチエスターに並ぶことが出来ると思ひます。この水俣町の淇水文庫には二つの意味がある。第一に、学校外の学校としてあらゆる方々が考へてゐる通り、一般普通の人々に開放すること、第二、特別の研究調査者に資料を供給することであるが、この淇水文庫の特色は、他に類のなき書類を求めて一般に資料を供給するにある。水俣町に於ける窒素会社の如く、世界と云はれざるまでもなく日本国中に知らせ度い。

水俣に於ける私の父及私の先祖に就て申上げる必要はなく、水俣では第一深-water家と云ふのがありまして、私共の徳富家は深-water家と濃厚な関係でありまして、頼寛翁は父と非常な交誼でありました。水俣吉右衛門と云ふ者が

居りましたが、深水喬翁の名は私の祖父がつけたのであります。又園田家もありまして、月浦翁は昌平賢に学ばれた。いろいろの名家があつて、今日の水俣を共同一致して今日に到らしめた水俣の教育は、祖先の太多七が初めて学校を興したのに起ります。観音堂前に居られた坊さんで、独専和尚といふ人が若干の尽力をなさいました。私たちの祖先は極めて微小なる事ではありましたが、水俣町の為めに文教扶植に努力した効果があつたと思ふ。私の父の事を申上げるのは、子として憚りますが、私の父はえらいとか豪傑とか云ふことは私からは見出しません。私はまだ父の様に謙遜な人は見た事がない。謙遜とは人にへつらうとか云ふ様な意味で無く、心から常に自分には及ばないと考へてゐた事でありまして、熊本で仕官して奏任官になつた事があるが、父は此の事を心から謙遜して、何卒自分を元の判任官に使つて下さいと願ふたのであります。世の中には運動して立身出世しやうとする人があるが、位を落して使つて下さい、と云ふ人は珍しいのであります。私は十代の時には父は意気地なしと思ふたが、私は年をとつて父に及ばないと思ひ、心をかけて思ふ時、梯子をかけて上つても靴の紐を解く事も到底出来ないと思ひます。父は自分の善事を為す事は勿論でありますが、人の善いことを喜ぶ事を最上としてゐた。何よりの土産よりも世の中の美談を聞く事を楽しみとして、さうして九十三歳迄永生きしたのであります。死ぬまで精神上の念を忘れず、毎日／＼克明に新聞を切抜いて心を正してゐました。

衛の武公の詩にある様に、年をとつても向上の心を失はないと云ふ所に心掛けてゐました。淇水の号は、その精神に背かない為め精進したのであります。何一つ世の中に秀でた事はないが、少くとも水俣が生んだ一人の善人、若くは偉人たらしめるのであると、私から申上げて不足ではないと思ひます。淇水文庫の名を父の名でつけたのは有難く、父も本望であらうと思ひます。父は情の深い方で、寝ても覚めても水俣の事を忘れないで、逗子が水俣に似てゐると云ふ動機から逗子にゐたのであります。芦北の方が御出になれば珍客として待遇したの

であります。私共は傍から見て馬鹿馬鹿しい程、父の力で出来る御世話は致しました。父の希望を云つたならば、何か水俣にしたいが心であつたと思ひます。父の墓は青山にあります。父の魂は、恐らく恋しい水俣にある事と思ひます。父の志を輔くるために、水俣に御尽しするのは、私が親に尽す孝養の一端でなからうかと思ひます。今日欠げ茶碗の一つが十万両二十万両する時に、少許りの金を贈るのは恥しいのであります。併し私の父は、常に天下の為に働かなければならぬと教へましたが、金儲をせよとは曾て云つた事はなかつた。

〔私は〕十九の歳上京後勉強したが、金儲けしようと思ふて勉強はしなかつたのであります。金儲が悪いとは思はぬ。只私としては、国家に尽すために勉強しました。世の中には貧乏人で金持の顔をし金持で貧乏人の顔をして居る者は居ますが、私は持たずして持つたような顔は致しません。

私は洋服細民で一種の労働者であります。稼がなければ食へない。稼いで食つてゐる労働者であります。真に少いが、徳富があり余つた金でないと思はないで下さい。此の金は雑誌社より原稿料の前借でありまして、懐中にあるのではない。労働をして得た正しい金である。又稼がなければならぬ金である。私は青山会館の開設、国民教育奨励会等身分不相応な仕事をしてゐるのであつてみれば、少し宛しかつぎたしが出来ないかも知れませぬが、御努めしようと思ふ。父が書いたものを、私や亡弟が書いたものを、この書籍館に出来るだけ供託したい。それが水俣町の精神的方面の燈台とならば望外の幸である。どうか皆様が此の館を利用して下さる様に希望致します。

本日は、定めし私の父も地下で喜んでゐると思ひます。

〔翻刻注…原文を尊重し、文章としての不備や誤字は極力修正していない。ただし「」を付して必要最低限の補足を施し文意をとりやすくした。段落替えや句読点追加は適宜行い、旧漢字は新字体にあらためた。なお、本史料は、伊藤彌彦氏が

作成されていた翻刻草稿を、田中が補完したものである。翻刻のみならず、史料調査から本稿作成に至るまで、伊藤氏の多大な協力を得た。

(注)

(1) 以下、淇水文庫の歴史については、水俣町立淇水文庫がまとめた小冊子『水俣町立淇水文庫経営の実際』一九三二年五月、同
一九三四年十月三十日の両冊による。

(2) 以下、図書館についてはすべて、注1の両冊に記されるところによる。引用については、旧字体は新字体とし、句読点は適宜付した。

(3) 水俣市教育委員会に勤務していた職員洲上佳代氏から伊藤彌彦氏が教示を受けたもの。

(4) 『蘇峰叢書第十二冊 読書と散歩』（民友社、一九二九年）の巻頭言（一―四頁）。

(5) 「書籍の行方」（『紙魚叢話』のうち）（『徳富蘇峰成實堂閑記』書物展望社、一九三三年、七一―二頁）。

(6) 東京に出てきて以来、書籍を売ったことはないと述べた蘇峰であるが、一九四〇年になって、お茶の水図書館を創設した石川武美に、収集した古典籍や古文書約十萬冊を一括して売却した。現在、一般財団法人石川武美記念図書館「成實堂文庫」の名で公開されているこのコレクションは、奈良時代から幕末に至る史料をはじめ、中国・朝鮮などの書籍にも及び、多くに蘇峰自身の手による書き込みの跡があるという。蘇峰の書籍や図書館に対する考え方を検討する上で、淇水文庫とともに考慮に入れなくてはならない図書館である。同図書館については、ホームページ（<http://www.ochato.or.jp/bunkoh.html>）二〇一七年十月三十一日現在）を参照。